雁の童子

宮沢賢治

流沙（るさ）の南の、楊（やなぎ）で囲（かこ）まれた小さな泉（いずみ）で、私は、いった麦粉（むぎこ）を水にといて、昼の食事（しょくじ）をしておりました。

そのとき、一人の巡礼（じゅんれい）のおじいさんが、やっぱり食事のために、そこへやって来ました。私たちはだまって軽（かる）く礼をしました。

けれども、半日まるっきり人にも出会（であ）わないそんな旅（たび）でしたから、私は食事がすんでも、すぐに泉とその年老（としと）った巡礼とから、別（わか）れてしまいたくはありませんでした。

私はしばらくその老人（ろうじん）の、高い咽喉仏（のどぼとけ）のぎくぎく動（うご）くのを、見るともなしに見ていました。何か話し掛（か）け

たいと思いましたが、どうもあんまり向(むこ)うが寂(しず)かなので、私は少しきゅうくつにも思いました。

けれども、ふと私は泉のうしろに、小さな祠(ほこら)のあるのを見付(みつ)けました。それは大へん小さくて、地理学者や探険家(たんけんか)ならばちょっと標本(ひょうほん)に持(も)って行けそうなものではありましたがまだ全(まった)くあたらしく黄いろと赤のペンキさえ塗(ぬ)られていかにも異様(いよう)に思われ、その前には、粗末(そまつ)ながら一本の幡(はた)も立っていました。

私は老人(ろうじん)が、もう食事も終(おわ)りそうなのを見てたずねました。

「失礼(しつれい)ですがあのお堂(どう)はどなたをおまつりしたのです

か。」

その老人も、たしかに何か、私に話しかけたくていたのです。だまって二、三度うなずきながら、そのたべものをのみ下して、低く言いました。

「……童子のです。」

「童子ってどう云う方ですか。」

「雁の童子と仰っしゃるのは。」老人は食器をしまい、屈んで泉の水をすくい、きれいに口をそそいでからまた云いました。

「雁の童子と仰っしゃるのは、まるでこの頃あった昔ばなしのようなのです。この地方にこのごろ降り

られました天童子だというのです。このごろ流沙の向う側にも、あちこち建っております。」

「天のこどもが、降りたのですか。罪があって天から流されたのですか。」

「さあ、よくわかりませんが、よくこの辺でそう申します。多分そうでございましょう。」

「いかがでしょう、聞かせて下さいませんか。お急ぎでさえなかったら。」

「いいえ、急ぎはいたしません。私の聴いただけお話いたしましょう。

沙車に、須利耶圭という人がございました。名門で

はございましたそうですが、おちぶれて奥(おく)さまと二人、ご自分は昔(むかし)からの写経(しゃきょう)をなさり、奥さまは機(はた)を織(お)って、しずかにくらしていられました。

ある明方(あけがた)、須利耶さまが鉄砲(てっぽう)をもったご自分の従弟(いとこ)のかたとご一緒(いっしょ)に、野原を歩いていられました。地面(じめん)はごく麗(うる)わしい青い石で、空がぼうっと白く見え、雪もま近(ぢか)でございました。

須利耶さまがお従弟さまに仰(お)っしゃるには、お前もさような慰(なぐさ)みの殺生(せっしょう)を、もういい加減(かげん)やめたらどうだと、斯(こ)うでございました。

ところが従弟の方が、まるですげなく、やめられな

いと、ご返事です。

（お前はずいぶんむごいやつだ、お前の傷めたり殺したりするものが、一体どんなものだかわかっているか、どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ。）と、須利耶さまは重ねておさとしになりました。

（そうかもしれないよ。けれどもそうでないかもしれない。そうだとすればおれは一層おもしろいのだ、まあそんな下らない話はやめろ、そんなことは昔の坊主どもの言うこった、見ろ、向うを雁が行くだろう、おれは仕止めて見せる。）と従弟のかたは鉄砲を構えて、走って見えなくなりました。

須利耶(すりや)さまは、その大きな黒い雁の列(れつ)を、じっと眺(なが)めて立たれました。

そのとき俄(にわ)かに向(むこ)うから、黒い尖(とが)った弾丸(だんがん)が昇(のぼ)って、まっ先きの雁の胸(むね)を射(い)ました。

雁は二、三べん揺(ゆ)らぎました。見る見るからだに火が燃(も)え出し、世(よ)にも悲(かな)しく叫(さけ)びながら、落(お)ちて参(まい)ったのでございます。

弾丸がまた昇って次(つぎ)の雁の胸をつらぬきました。それでもどの雁も、遁(に)げはいたしませんでした。

却(かえ)って泣(な)き叫びながらも、落ちて来る雁に随(したが)いました。

第三の弾丸が昇り、

第四の弾丸がまた昇りました。

六発の弾丸が六疋の雁を傷つけまして、一ばんしまいの小さな一疋だけが、傷つかずに残っていたのでございます。燃え叫ぶ六疋は、悶えながら空を沈み、しまいの一疋は泣いて随い、それでも雁の正しい列は、決して乱れはいたしません。

そのとき須利耶さまの愕ろきには、いつか雁がみな空を飛ぶ人の形に変っておりました。

赤い焔に包まれて、歎き叫んで手足をもだえ、落ちて参る五人、それからしまいに只一人、完いものは

可愛らしい天の子供でございました。

そして須利耶さまは、たしかにその子供に見覚えがございました。最初のものは、もはや地面に達しまする。それは白い鬚の老人で、倒れて燃えながら、骨立った両手を合せ、須利耶さまを拝むようにして、切なく叫びますのには、

（須利耶さま、須利耶さま、おねがいでございます。どうか私の孫をお連れ下さいませ。）

もちろん須利耶さまは、馳せ寄って申されました。

（いいとも、いいとも、確かにおれが引き取ってやろう。しかし一体お前らは、どうしたのだ。）そのとき次々に

雁が地面に落ちて来て燃えました。大人もあれば美しい瓔珞をかけた女子もございました。その女子はまっかな焔に燃えながら、手をあのおしまいの子にのばし、子供は泣いてそのまわりをはせめぐったと申しまする。雁の老人が重ねて申しますには、（私共は天の眷属でございます。罪があってただいままで雁の形を受けておりました。只今報いを果しました。私共は天に帰ります。ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは縁のあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てを願います。おねがいでございます。）と斯うでございます。

須利耶さまが申されました。

(いいとも。すっかり判った。引き受けた。安心してくれ。)

すると老人は手を擦って地面に頭を垂れたと思うと、もう燃えつきて、影もかたちもございませんでした。須利耶さまも従弟さまも鉄砲をもったままぼんやりと立っていられましたそうでいったい二人いっしょに夢を見たのかとも思われましたそうですがあとで従弟さまの申されますにはその鉄砲はまだ熱く弾丸は減っておりそのみんなのひざまずいた所の草はたしかに倒れておったそうでございます。

そしてもちろんそこにはその童子が立っていられましたのです。須利耶さまはわれにかえって童子に向って云われました。

(お前は今日からおれの子供だ。もう泣かないでいい。お前の前のお母さんや兄さんたちは、立派な国に昇って行かれた。さあおいで。)

須利耶さまはごじぶんのうちへ戻られました。途中の野原は青い石でしんとして子供は泣きながら随いて参りました。

須利耶さまは奥さまとご相談で、何と名前をつけようか、三、四日お考えでございましたが、そのうち、

話はもう沙車全体にひろがり、みんなは子供を雁の童子と呼びましたので、須利耶さまも仕方なくそう呼んでおいでございました。」

老人はちょっと息を切りました。私は足もとの小さな苔を見ながら、この怪しい空から落ちて赤い焔につつまれ、かなしく燃えて行く人たちの姿を、はっきりと思い浮べました。老人はしばらく私を見ていましたが、また語りつづけました。

「沙車の春の終りには、野原いちめん楊の花が光って飛びます。遠くの氷の山からは、白い何とも云えず瞳を痛くするような光が、日光の中を這ってまい

ります。それから果樹(かじゅ)がちらちらゆすれ、ひばりはそらですきとおった波(なみ)をたてまする。童子(どうじ)は早くも六つになられました。春のある夕方のこと、須利耶(すりや)さまは雁(かり)から来たお子さまをつれて、町を通って参(まい)られました。葡萄(ぶどう)いろの重(おも)い雲の下を、影法師(かげぼうし)の蝙蝠(こうもり)がひらひらと飛んで過(す)ぎました。

子供らが長い棒(ぼう)に紐(ひも)をつけて、それを追(お)いました。

(雁の童子だ。雁の童子だ。)

子供らは棒を棄(す)て手をつなぎ合って大きな環(わ)になり須利耶さま親子を囲(かこ)みました。

須利耶さまは笑(わら)っておいででございました。

子供らは声を揃えていつものようにはやしまする。
（雁の子、雁の子雁童子、
　空から須利耶におりて来た。）と斯うでございます。けれども一人の子供が冗談に申しまするには、
（雁のすてご、雁のすてご、
　春になってもまだ居るか。）
みんなはどっと笑いましてそれからどう云うわけか小さな石が一つ飛んで来て童子の頬を打ちました。須利耶さまは童子をかばってみんなに申されますのには、
　おまえたちは何をするんだ、この子供は何か悪いこ

とをしたか、冗談にも石を投げるなんていけないぞ。

子供らが叫んでばらばら走って来て童子に詫びたり慰めたりいたしました。或る子は前掛けの衣嚢から干した無花果を出して遣ろうといたしました。

童子は初めからお了いまでにこにこ笑っておられました。須利耶さまもお笑いになりみんなを赦して童子を連れて其処をはなれなさいました。

そして浅黄の瑪瑙の、しずかな夕もやの中でいわれました。

（よくお前はさっき泣かなかったな。）その時童子はお父さまにすがりながら、

（お父さんわたしの前のおじいさんはね、からだに弾丸（たま）をからだに七つ持（も）っていたよ。）と斯（こ）う申（もう）されたと伝（つた）えます。」

　巡礼（じゅんれい）の老人（ろうじん）は私の顔を見ました。

私もじっと老人のうるんだ眼（め）を見あげておりました。

老人はまた語りつづけました。

「また或（あ）る晩（ばん）のこと童子（どうじ）は寝付（ねつ）けないでいつまでも床（とこ）の上でもがきなさいました。（おっかさんねむられないよう。）と仰（お）っしゃりまする、須利耶（すりや）の奥（おく）さまは立って行って静（しず）かに頭を撫（な）でておやりなさいました。童子さまの脳（のう）はもうすっかり疲（つか）れて、白い網（あみ）のようになっ

て、ぶるぶるゆれ、その中に赤い大きな三日月が浮かんだり、そのへん一杯にぜんまいの芽のようなものが見えたり、また四角な変に柔らかな白いものが、だんだん拡がって恐ろしい大きな箱になったりするのでございました。母さまはその額が余り熱いといって心配なさいました。須利耶さまは写しかけの経文に、掌を合せて立ちあがられ、それから童子さまを立たせて、紅革の帯を結んでやり表へ連れてお出になりました。駅のどの家ももう戸を閉めてしまって、一面の星の下に、棟々が黒く列びました。その時童子はふと水の流れる音を聞かれました。そしてしばらく考えて

から、
（お父さん、水は夜でも流れるのですか。）とお尋ねです。須利耶さまは沙漠の向うから昇って来た大きな青い星を眺めながらお答えなされます。
（水は夜でも流れるよ。水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかったら、いつまでもいつまでも流れるのだ。）
　童子の脳は急にすっかり静まって、そして今度は早く母さまの処にお帰りなりとうなりまする。
（お父さん。もう帰ろうよ。）と申されながら須利耶さまの袂を引っ張りなさいます。お二人は家に入り、

母さまが迎（むか）えなされて戸の環（わ）を嵌（は）めておられますうちに、童子はいつかご自分の床（とこ）に登（のぼ）って、着換（きが）えもせずにぐっすり眠（ねむ）ってしまわれました。

また次（つぎ）のようなことも申（もう）します。

ある日須利耶さまは童子と食卓（しょくたく）にお座（すわ）りなさいました。食品の中に、蜜（みつ）で煮（に）た二つの鮒（ふな）がございました。須利耶の奥（おく）さまは、一つを須利耶さまの前に置（お）かれ、一つを童子にお与（あた）えなされました。

（喰（た）べたくないよおっかさん。）童子が申されました。

（おいしいのだよ。どれ、箸（はし）をお貸（か）し。）

須利耶の奥さまは童子の箸をとって、魚を小さく砕（くだ）

きながら、（さあおあがり、おいしいよ。）と勧(すす)められます。童子は母さまの魚を砕く間、じっとその横顔(よこがお)を見ていられましたが、俄(にわ)かに胸(むね)が変(へん)な工合(ぐあい)に迫(せま)ってきて気の毒(どく)なような悲(かな)しいような何とも堪(たま)らなくなりました。くるっと立って鉄砲玉(てっぽうだま)のように外へ走って出られました。そしてまっ白な雲の一杯(いっぱい)に充(み)ちた空に向(むか)って、大きな声で泣(な)き出しました。まあどうしたのでしょう、と須利耶の奥さまが愕(おど)ろかれます。どうしたのだろう行ってみろ、と須利耶さまも気づかわれます。そこで須利耶(すりや)の奥さまは戸口にお立ちになりましたら童子はもう泣きやんで笑(わら)っていられましたとそんなこ

とも申し伝(つた)えます。

またある時、須利耶さまは童子をつれて、馬市(うまいち)の中を通られましたら、一疋(ぴき)の仔馬(こうま)が乳(ちち)を呑(の)んでおったと申します。黒い粗布(あらぬの)を着(き)た馬商人(うましょうにん)が来て、仔馬を引きはなしもう一疋の仔馬に結(むす)びつけ、そして黙(だま)ってそれを引いて行こうと致(いた)しまする。母親の馬はびっくりして高く鳴きました。なれども仔馬はぐんぐん連(つ)れて行かれまする。向うの角(かど)を曲(まが)ろうとして、仔馬は急(いそ)いで後肢(あとあし)を一方あげて、腹(はら)の蠅(はえ)を叩(たた)きました。

童子は母馬の茶いろな瞳(ひとみ)を、ちらっと横眼(よこめ)で見られましたが、俄(にわ)かに須利耶さまにすがりついて泣き出

されました。けれども須利耶さまはお叱りなさいませんでした。ご自分の袖で童子の頭をつつむようにして、馬市を通りすぎてから河岸の青い草の上に童子を座らせて杏の実を出しておやりになりながら、しずかにおたずねなさいました。

(お前はさっきどうして泣いたの。)

(だってお父さん。みんなが仔馬をむりに連れて行くんだもの。)

(馬は仕方ない。もう大きくなったからこれから独りで働らくんだ。)

(あの馬はまだ乳を呑んでいたよ。)

（それはそばに置（お）いてはいつまでも甘（あま）えるから仕方ない。）

（だってお父さん。みんながあのお母さんの馬にも子供（こども）の馬にもあとで荷物（にもつ）を一杯（いっぱい）つけてひどい山を連れて行くんだ。それから食べ物がなくなると殺（ころ）して食べてしまうんだろう。）

　須利耶（すりや）さまは何気（なにげ）ないふうで、そんな成人（おとな）のようなことを云（い）うもんじゃないとは仰（お）っしゃいましたが、本統（ほんとう）は少しその天の子供が恐（おそ）ろしくもお思いでしたと、まあそう申（もう）し伝（つた）えます。

　須利耶さまは童子を十二のとき、少し離（はな）れた首都（しゅと）の

ある外道（げどう）の塾（じゅく）にお入れなさいました。

童子の母さまは、一生けん命機（はた）を織（お）って、塾料（じゅくりょう）や小遣（こづか）いやらを拵（こし）らえてお送（おく）りなさいました。

冬が近くて、天山はもうまっ白になり、桑（くわ）の葉（は）が黄いろに枯（か）れてカサカサ落（お）ちました頃（ころ）、ある日のこと、童子が俄（にわ）かに帰っておいでです。母さまが窓（まど）から目敏（めざと）く見付（みつ）けて出て行かれました。

須利耶さまは知らないふりで写経（しゃきょう）を続（つづ）けておいでです。

（まあお前は今ごろどうしたのです。）

（私、もうお母さんと一緒（いっしょ）に働（はたら）こうと思います。

勉強（べんきょう）している暇（ひま）はないんです。）

母さまは、須利耶（すりや）さまのほうに気兼（きが）ねしながら申（もう）されました。

（お前はまたそんなおとなのようなことを云（い）って、仕方（しかた）ないではありませんか。早く帰って勉強（べんきょう）して、立派（りっぱ）になって、みんなの為（ため）にならないとなりません。）

（だっておっかさん。おっかさんの手はそんなにガサガサしているのでしょう。それだのに私の手はこんななんでしょう。）

（そんなことをお前が云わなくてもいいのです。誰（だれ）でも年を老（と）れば手は荒（あ）れます。そんなことより、早く

帰って勉強をなさい。お前の立派になることばかり私には楽みなんだから。お父さんがお聞きになると叱られますよ。ね。さあ、おいで。）と斯う申されます。

童子はしょんぼり庭から出られました。それでも、また立ち停ってしまわれましたので、母さまも出て行かれてもっと向うまでお連れになりました。そこは沼地でございました。母さまは戻ろうとしてまた（さあ、おいで早く。）と仰っしゃったのでしたが童子はやっぱり停まったまま、家の方をぼんやり見ておられますので、母さまも仕方なくまた振り返って、蘆を一本抜いて小さな笛をつくり、それをお持たせになりま

した。
　童子（どうじ）はやっと歩き出されました。そして、遥（はる）かに冷（つめ）たい縞（しま）をつくる雲のこちらに、蘆がそよいで、やがて童子の姿（すがた）が、小さく小さくなってしまわれました。俄（にわ）かに空を羽音がして、雁（かり）の一列（いちれつ）が通りました時、須利耶（すりや）さまは窓（まど）からそれを見て、思わずどきっとなされました。
　そうして冬に入りましたのでございます。その厳（きび）しい冬が過（す）ぎますと、まず楊（やなぎ）の芽（め）が温和（おとな）しく光り、沙漠（さばく）には砂糖水（さとうみず）のような陽炎（かげろう）が徘徊（はいかい）いたしまする。杏（あんず）やすもの白い花が咲（さ）き、次（つい）では木立（こだち）も草地もまっ青（さお）に

なり、もはや玉髄（ぎょくずい）の雲の峯（みね）が、四方の空を繞（めぐ）る頃（ころ）となりました。

ちょうどそのころ沙車（さしゃ）の町はずれの砂（すな）の中から、古い沙車大寺のあとが掘（ほ）り出されたとのことでございました。一つの壁（かべ）がまだそのままで見附（みつ）けられ、そこには三人の天童子が描（えが）かれ、ことにその一人はまるで生きたようだとみんなが評判（ひょうばん）しましたそうです。或（あ）るよく晴れた日、須利耶さまは都（みやこ）に出られ、童子の師匠（ししょう）を訪（たず）ねて色々礼（れい）を述（の）べ、また三巻（みまき）の粗布（あらぬの）を贈（おく）り、それから半日、童子を連（つ）れて歩きたいと申（もう）されました。

お二人は雑沓（ざっとう）の通りを過ぎて行かれました。

須利耶さまが歩きながら、何気（なにげ）なく云（い）われますには、

（どうだ、今日（きょう）の空の碧（あお）いことは、お前がたの年は、丁度（ちょうど）今あのそらへ飛（と）びあがろうとして羽をばたばた云（い）わせているようなものだ。）

童子（どうじ）が大へんに沈（しず）んで答えられました。

（お父さん。私はお父さんとはなれてどこへも行きたくありません。）

須利耶（すりや）さまはお笑（わら）いになりました。

（勿論（もちろん）だ。この人の大きな旅（たび）では、自分だけひとり遠い光の空へ飛び去（さ）ることはいけないのだ。）

（いいえ、お父さん。私はどこへも行きたくありませ

ん。そして誰もどこへも行かないでいいのでしょうか。）とこう云う不思議なお尋ねでございます。

（誰もどこへも行かないでいいかってどう云うことだ。）

（誰もね、ひとりで離れてどこへも行かないでいいのでしょうか。）

（うん。それは行かないでいいだろう。）と須利耶さまは何の気もなくぼんやりと斯うお答えでした。

そしてお二人は町の広場を通り抜けて、だんだん郊外に来られました。沙がずうっとひろがっておりました。その砂が一ところ深く掘られて、沢山の人がそ

の中に立ってございました。お二人も下りて行かれたのです。そこに古い一つの壁がありました。色はあせてはいましたが、三人の天の童子たちがかいてございました。須利耶さまは思わずどきっとなりました。何か大きい重いものが、遠くの空からばったりかぶさったように思われましたのです。それでも何気なく申されますには、
（なるほど立派なもんだ。あまりよく出来てなんだか恐いようだ。この天童はどこかお前に肖ているよ。）
　須利耶さまは童子をふりかえりました。そしたら童子はなんだかわらったまま、倒れかかっていられまし

た。須利耶さまは愕いて急いで抱き留められました。童子はお父さんの腕の中で夢のようにつぶやかれました。

(おじいさんがお迎いをよこしたのです。)

須利耶さまは急いで叫ばれました。

(お前どうしたのだ。どこへも行ってはいけないよ。)

童子が微かに云われました。

(お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんが書いたのです。そのとき私は王の……だったのですがこの絵ができてから王さまは殺されわたくしどもはいっしょに出家したのでしたが

敵王(てきおう)がきて寺を焼(や)くとき二日ほど俗服(ぞくふく)を着(き)てかくれているうちわたくしは恋人(こいびと)があってこのまま出家にかえるのをやめようかと思ったのです。）

人々が集(あつま)って口々に叫びました。

（雁(かり)の童子だ。雁の童子だ。）

童子はも一度(いちど)、少し唇(くちびる)をうごかして、何かつぶやいたようでございましたが、須利耶さまはもうそれをお聞きとりなさらなかったと申(もう)します。

私の知っておりますのはただこれだけでございます。」

老人(ろうじん)はもう行かなければならないようでした。私は

ほんとうに名残り惜しく思い、まっすぐに立って合掌して申しました。

「尊いお物語をありがとうございました。まことにお互い、ちょっと沙漠のへりの泉で、お眼にかかって、ただ一時を、一緒に過ごしただけではございますが、これもかりそめのことではないと存じます。ほんの通りかかりの二人の旅人とは見えますが、実はお互がどんなものかもよくわからないのでございます。いずれはもろともに、善逝の示された光の道を進み、かの無上菩提に至ることでございます。それではお別れいたします。さようなら。」

老人は、黙って礼を返しました。何か云いたいようでしたが黙って俄かに向うを向き、今まで私の来た方の荒地にとぼとぼ歩き出しました。私もまた、丁度その反対の方の、さびしい石原を合掌したまま進みました。

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店
　　　１９９６（平成８）年６月20日再版
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　　１９９５（平成７）年５月発行
入力：浜野智
校正：浜野智
１９９９年７月26日公開
２００７年８月３日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。